

ゲン

飛べ 大空へ

三宅 慶一



亀岡の大空を舞う ゲン

目 次

- I はじめに
- II チョウゲンボウ
 - ・分類
 - ・繁殖
 - ・近年の生息変化
 - ・チョウゲンボウの習性と能力
- III チョウゲンボウの雛、保護から放鳥までの記録
 - ・市街地繁殖
 - ・カラス襲撃事件
 - ・JR 二条駅舎チョウゲンボウ見守り隊
 - ・チョウゲンボウの雛、保護・依頼
 - ・チョウゲンボウの雛、搬入・保護
 - ・ゲンの野生復帰計画
 - ・ゲンの保護記録
 - ・ゲンの餌
 - ・ゲンのエンリッチメント
 - ・ゲンの放鳥
- IV おわりに



JR 二条駅舎、ここでチョウゲンボウが 07 年から 4 年続けて繁殖をしている

はじめに

「ゲン」とは、保護されたチョウゲンボウの雛につけられた名前であります。

「ゲン 飛べ 大空へ」は、ゲンの保護から放鳥までの記録であります。

チョウゲンボウが、京都市市街地中央に位置する JR 二条駅舎において、2007 年から繁殖していました。当初から、ここに地元の愛鳥家が集まり「JR 二条駅舎 チョウゲンボウ見守り隊」が結成されました。

チョウゲンボウの雛 5 羽が生まれて約 10 日後のことです。2010 年 5 月 30 日、カラスが親鳥の監視の隙を狙って巣を襲撃しました。雛 1 羽が奪われ、1 羽が巣から落下しました。雛 3 羽は難を逃れました。落下した雛は見守り隊が保護することになり、その雛の飼養は私が受け持つことになりました。

雛の保護に関わった人たちはゲンの放鳥後のことをとても心配しました。心配のあまり「野生のことをまったく知らない雛であるから、終生人間の保護下に置くこと」を希望する人が何人もおられました。しかし、私は法律に従いゲンを野に放すことを第一とし、その計画を立てゲンを育てました。一方、バトンタッチできる大きな保護施設を探すことにしました。

放鳥を成功させるには、ゲンの健康状態・精神状態が完璧でなくてはなりません。私は、保護に関わった人たちに「ゲンの発育の良さ、完璧さ」をみせ、また「チョウゲンボウは猛禽類の中でも放鳥成功率が高いであろう」ということを説明し、放鳥の同意が得られるように努めました。

結果、現時点ではバトンタッチできる保護施設がないこと、ゲンが完璧に成長していることにより、私たちの手でゲンを放鳥することになりました。

私は、以前から宇治の巨椋でチョウゲンボウの生態観察をしています。今回このチョウゲンボウの雛の保護を機会に、チョウゲンボウの生態をまとめることにしました。「チョウゲンボウの雛、保護から放鳥までの記録」とともに、ここに発表させていただきます。

2011 年 3 月

三宅 慶一

チョウゲンボウ

・ 分類：タカ目 Order FALCONIFORMES

 ハヤブサ科 Family FALCONIDAE

 ハヤブサ属 FALCO Linnaeus

日本名：チョウゲンボウ

漢字：長元坊

学名：Falco tinnunculus Linnaeus, 1758

英名：Kestrel （or Eurasian Kestrel）

・ 繁殖

一腹卵数：3～9個

抱卵期間：28～31日

巣立ちまでの日数：27～33日

・ 近年の生息変化

近年、チョウゲンボウが都市部において、以前より増して確認されるようになった。その上、人工建造物を利用し繁殖するようにもなってきた。その繁殖確認も年々増加傾向であるようだ。一時、山間部集団繁殖地での営巣が減少しチョウゲンボウの今後が心配されていたが、チョウゲンボウが生息地や営巣地を都市部に求めたことによって、今後は生息数増加が期待できるのではないだろうか。

いま、チョウゲンボウは京都府のレッド・リストに挙げられている準絶滅危惧種である。私たちは、都市部進出のチョウゲンボウを理解し優しく見守ることが必要とおもわれる。



・チョウゲンボウの習性・能力について

タカ類やハヤブサ類は古来、鷹狩りの鳥として有用されている。しかし、ハヤブサの1種であるチョウゲンボウは、鷹の仲間でありながら「鷹狩りに使えない」との理由により、クソトビとかマグソツカミなどと軽蔑された名前がつけられたという歴史がある。なぜならチョウゲンボウは飛翔中の小鳥や逃げ回る小動物を追跡してそれを狩るという狩猟法をしないからだ。「マグソツカミ」それは鷹匠からの一方的な見方による蔑称にしか過ぎない。私はチョウゲンボウを観察し、調べていくうちに、チョウゲンボウは、「餌や環境に順応する能力」を持った鷹であることが分かってきた。そこで私が観察したことやいろいろな情報を基にして、今一度、チョウゲンボウの習性・能力を考えてみることにした。

ペリットからの分析によると、チョウゲンボウは、ネズミやモグラ、小鳥類、爬虫類、昆虫と多種類の小動物を餌としていることが分かる。このことは「食性は動物類ならなんでも食べる」という柔軟性に富んでいるということであり、ある種の食糧不足や食料事情の変化に対して臨機応変に他の餌に切り替えることができるということ。チョウゲンボウは餌探しに悩むことが少ないということになる。

チョウゲンボウはよくキィキィキィキィと威嚇(警告) 声を発する。「声を聴いた小鳥は怯えて地上にひれ伏す」そこをひょいっと襲えばよいだけだ。しかし小鳥が、我慢ができず飛び立つと、「飛び立つときのスピードの遅い瞬間をも狙って狩をもする」という観察例を教えてもらった(山西氏)。なるほど賢い狩猟法だ。また、都市部では5月～7月において、スズメやツバメの巣立ち雛がたくさん出現する。そのひ弱な巣立ち雛の捕獲はいとも簡単だ。二条駅舎のチョウゲンボウの雛の餌は小鳥類が多い。親は、雛が5羽いようと雛に与える餌に不足して困ることはない。

繁殖期以外は鳴かないともいわれているが、繁殖時のコミュニケーションのためと威嚇以外は鳴く必要がないからと考えられる。

チョウゲンボウの雛が巣立つのは6月上旬～7月下旬頃だろう、そして幼鳥は巣立ち後しばらくして親から独立しなければならない。その幼鳥に狩の技術、ホバリングの飛翔技術が十分備わっているだろうか、あるとはおもえない。しかし餌取りに心配することはないだろう。そのころ都市部ではスズメやツバメの巣立ち雛がたくさんいる。また、隣接する河原や農耕地に移動すれば、7月からはバツタ類が出現し、8月に入ればイナゴがこれでもかというくらいたくさん出現するしネズミ、モグラ、トカゲやヘビなども多い。狩猟技術の未熟な幼鳥でも巣立ち雛、地表に出

たモグラ、カマキリやバッタなどの小動物の捕獲は簡単なことで、餌に不足し飢える可能性は低いだろう。また、8、9月になるとトンボの出現も多い。トンボは空中での捕獲となるが小鳥より狩りしやすい餌だ。このトンボ狩をマスターすればノネズミの捕獲も難なくこなせることになるのではないだろうか。

チョウゲンボウは、巨椋ではバッタ類を12月に入っても捕食している。また蝶や蛾の幼虫も捕食していた（餌のなかに「ミミズ」と書いてある図書まであったのには驚きだ）。厳しいことだが、幼鳥は昆虫類がいなくなる冬期までにネズミや小鳥を狩る能力を身につけなければならない。

冬季になると農耕地も休耕地が多くなり、また草原も枯れてしまう。そこにはネズミ類がたくさんいる。広大な農地や草原（草のない、あっても少ない時期）の中、ネズミ類を探すには広域をくまなく飛翔しなければならない、とても大変とおもう。しかし、チョウゲンボウにとっては、ネズミの生息場所を見つけることは簡単なことであるようだ。なぜならチョウゲンボウには、色の3原色（RGB）以外に紫外線が見えるという特殊能力があるからだ。紫外線が見えるということは、ネズミの排泄する有機物が見えるということになり、広域を探し回らなくてもいとも簡単にネズミの生息場所が特定できるということ。しかし、その場所には杭も電柱も電線もないことが多い、そこでチョウゲンボウはまた別の特殊能力をも持って対応している。それはホバリングの技術。だからチョウゲンボウはネズミを巧く捕獲できるわけである（『ネズミは通り道や縄張りに自分の尿や糞で印をつける。その排泄物は紫外線を吸収して通り道をくっきりと示す。春、草が伸びて通り道が見えなくなるまではこの感覚が特に役立つ』といわれている）。このように餌の変化に対応することで、チョウゲンボウは自然界をうまく生き延びていくようだ。

ここで鷲鷹の死亡率をみると、多くの種で幼鳥の死亡率が高い。しかし、チョウゲンボウは、『各年齢域において死亡率50%』、『平均寿命1.5年』との報告がある。1年目の幼鳥の生存率が50%とすると、バッタなどの比較的捕まえやすい昆虫を餌とすることで可能となったのではないだろうか。また寿命1.5年説や成鳥の死亡率50%説は、小鳥類の成鳥と何ら変わらないことになる。これは驚きである。このことは、チョウゲンボウが猛禽類であるものの、小型ゆえ、より大型の鷹やカラスに襲われたり、夜間就寝時にフクロウ類に襲われることがあるためと考えられる。比較的天敵が多いようだ。

繁殖地については、チョウゲンボウは基本的に餌があればどこでも生息地となり得る。森や林がなく開けたところ（山間部、草原、農耕地、沼沢地、河川、海岸線）

ならどこでも確認されるだろう。しかし、巢を造るとなるとどこでもよいということではなかった。一般的に言って、少し前までチョウゲンボウの繁殖地は山間部や海岸線の崖とされていたし、また、集団で営巣もした。このことは『チョウゲンボウは昆虫を多く食するので他の大型のタカの如く各個に広い狩猟なわばりを独占しなくてもよいことによるとおもわれる。これは餌さえ十分にとれば、鳥は一般に集団をつくる傾向があるということの1例』といわれており、日本各地にはその集団繁殖地が天然記念物に指定されるほどの名所があった。ところが近年、山間部の集団繁殖地での営巣が減り、都市部の人工建造物の利用が増えているということのようだ。このことの原因説には環境の変化、農薬、カラス等の影響説もあるが、繁殖の形態が変化しつつあることは明らかであり、これもチョウゲンボウの柔軟性がもたらしたものと考えられる。チョウゲンボウが、新たな営巣場所を見つけ出したことで、今後ますます子孫を増やしていくことだろうと考えられる。

チョウゲンボウは、いつの時代でも生き伸びていける適応能力の高いなんとすばらしい鷹なのであろうか。



昆虫をみつけ、狩にはいるチョウゲンボウ（上下写真）





空中を飛翔する昆虫をみつけ急降下するところ（左、中央。右 連続写真）



ホバリング



急降下にはいる態勢



急降下に入る態勢



地上の昆虫を狙っての急降下

ホバリング技術によって地上の小動物が捕獲できる。ホバリングする高度はあまり高くなく、電柱・電線の高さぐらいか、それ以下が多い



羽ばたいての停空飛翔。尾羽が開く



向い風を利用した停空飛翔。風のよう



農耕地では、杭の先や刈り取った干草に止まり、餌を探したり休憩したりする



電線や電柱も見張り処だ



電柱の足場用の杭もよく利用する



飛翔しながら獲物を食べることもある



お気に入りのお食事処、天板が汚れている



トンボの捕獲に入るところ



この攻撃は失敗であった

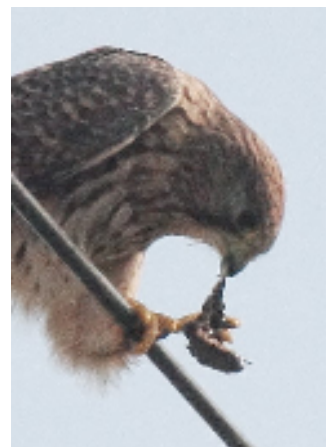


小さな昆虫類でも捕獲するときは足指（趾）でする

『ハヤブサの捕獲成功率は 260 回攻撃観察中わずか 19 回』、『ハイタカについては 190 回の攻撃をみたがそのうち成功はわずか 23 回』との報告例がある (Rudebeck 1951)。チョウゲンボウにとって、地上のバッタ類の捕獲は容易だが、飛翔中のトンボには苦勞しているようだ。



蛾の幼虫を運ぶところ



蛾の幼虫も食べる



稲を刈り取った田んぼでは、イナゴは発見しやすく、しかも捕獲が簡単だ



イナゴ（上）やショウリョウバッタ（下）を捕獲し、食事処へ運ぶところ





雛に獲物を運ぶ（二条駅舎）。雛の餌となるのはツバメやスズメの幼鳥が多い。嘴にくわえて運ぶこともある。小鳥の頭部は切断されている



猛禽類はカラスに攻撃されることが多い。チョウゲンボウにとっては体格差があるのでカラスは恐ろしい存在だ。飛翔技術の未熟な幼鳥にとっては脅威となるだろう。この個体は2年目の若雄？



『雄は3年目に成鳥となるが、1年目の秋には雌成鳥と同様になり、2年目には頭部だけが雄成鳥と同様で、背と尾は雌成鳥と同様である』といわれている。この個体は、頭部と尾に青みがあるが、尾の上面の先端が茶褐色であることと、雌に見られる黒い斑があるので2年目の若雄であろうとおもわれる

カラスの攻撃に対して逃げるだけのチョウゲンボウであるが、自分のテリトリー内に侵入してきた他の猛禽類に対しては、テリトリー外に出て行くようにと攻撃をかけたり、嫌がらせ飛翔をするようだ（擬攻撃）。私は、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、ノスリに対してそれを確認した。



オオタカがドバトを狩る態勢に入ったとき、背後から迫ってくるチョウゲンボウに気づく



背後のチョウゲンボウに対し、身体を反転し迎撃態勢をとるオオタカ、そのため狩はできなくなり飛び去っていった



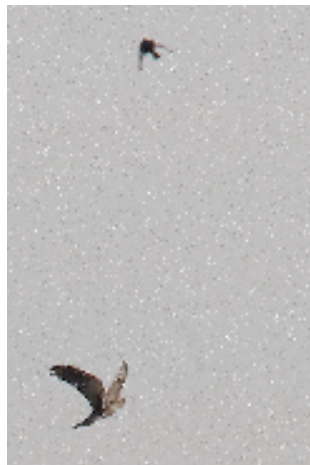
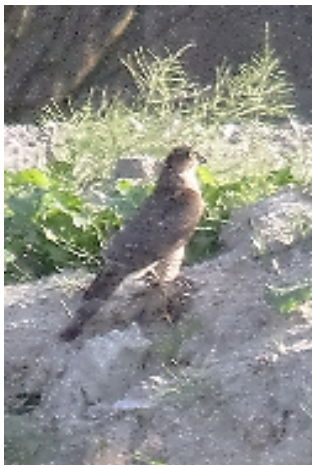
テリトリー内に侵入したノスリ（電柱）に対して、ここから出て行くようにと嫌がらせ飛翔をしているところ



上:チョウゲンボウ、下:コチョウゲンボウ。コチョウゲンボウは迎撃態勢で反転している



身体を反転させての急降下攻撃であるが、飛翔技術はコチョウゲンボウが一枚上のような。難なく攻撃をかわしている（下がチョウゲンボウ）。これは真剣な攻撃ではなく、遊びながらの追い出し飛翔とおもわれる。また、立場が逆転しチョウゲンボウが追い掛けられることも多い



チョウゲンボウのテリトリー内で待機していたところ、ハイタカが私の目の前を通過して土手で小鳥を捕獲した。それをみたチョウゲンボウが接近していったところ、ハイタカが手ぶらで飛び去った。そしてチョウゲンボウの足には小鳥が。チョウゲンボウがハイタカの獲物を奪ったのだ。

チョウゲンボウの雛、保護から放鳥までの記録

三宅 慶一

○市街地繁殖

京都市市街地のほぼ中央に二条城がある。堀川通りを隔ててその東側にホテルがあるが、私は「ホテルの最上階のベランダ部でチョウゲンボウが数年前から繁殖している」という情報を 2005 年に得ていた。地元野鳥観察家の山西氏は、04, 05, 06 年に繁殖を確認された。また、4 年前から二条城の西約 1 km にある JR 二条駅舎でチョウゲンボウの繁殖が確認されるようになった。2007 年 7 月 27 日、その繁殖事例が京都新聞によって京都市民に知られることとなった。私はそのときはじめてこの駅舎の繁殖のことを知ったのである。報道は繁殖に支障がないようにと繁殖の最終段階でなされたのであった。

JR 二条駅舎では 2007 年から今年までの 4 年間に 4 回繁殖が確認されている。そして、二条城前のホテルではチョウゲンボウの繁殖が 2007 年からは確認されていない。私は駅舎とホテルのチョウゲンボウは同一個体かその親戚筋に当たるものではないかとおもっている。

JR 二条駅舎の前には広大な更地があったのだが、ビルの建設予定地であった。2010 年の営巣時期には、この更地にビルが建設中であった。今年度の営巣が心配されていたが、うれしいことに 4 月下旬に営巣が確認された。そして今年も「見守り隊」が活動することになった。

○カラス襲撃事件

駅舎前のビルの建設によって、チョウゲンボウの巣の周りの視界環境がとても悪くなった。心配なことに駅舎の周辺にはカラスが生息していた。

5 月 30 日、その営巣場所においてカラスの襲撃事件が起きた。カラスがチョウゲンボウの親の監視の隙を狙って巣を襲い、1 羽の雛を奪い去ったのだ。チョウゲンボウの親がそのことに気づき、カラスを追撃したところ、カラスはその雛を空中で放棄した。雛は空中から地上へと落下した。見守り隊員が雛の救助に駆けつけたが、そのとき雛はすでに死亡していたという。雛の胸部にはカラスの嘴による大きな裂傷があった。カラスが嘴で雛の胸部を強くくわえたことが致命傷となったと考えられた。雛は、生後 10 日目ぐらい、5 番子？とおもわれた。

そのカラス襲撃事件のさなか、もう 1 羽の雛が、高さ約 20m の屋根裏にある巣から地上に落下した。二条駅舎は高架型であり、線路は地上約 10m、またその上

の駅舎の屋根までが約 10m はある建造物である。巣から落下したその雛の翼はまだ十分に伸びておらず羽ばたくことすらできないものであった。その雛は生後 15 日目ぐらい、1 番子か 2 番子とおもわれた。

雛が落下したとの知らせを受けた駅員が、京都市動物園野生鳥獣救護センター（以後、救護センター）に雛の保護を依頼した。しかし、落下雛が「孵化後間もない小さな雛」であるとの説明がされなかったからであろうか、救護センターは、鳥類保護連盟や日本野鳥の会が唱える「雛を拾わないで」キャンペーンの巣立ち雛に対する指導要綱に沿って保護指導をした。そして、駅員はその指導に従った。

落下雛は小さな箱に入れられ、注意書きとともに駅舎の巣の真下横の通路上に置かれた。注意書きには「ヒナが落ちてきたので保護しています。人間があまりにも近寄ると親鳥が近付けません。そっと見守ってやるのが最もよい解決方法だそうです。餌をやるのも飛び方を教えるのも親がするそうです。温かく見守ってやってください」と書かれていた（全文）。



カラスの襲撃を受け死亡した雛



落下した雛の保護（宇野氏撮影）

○JR 二条駅舎チョウゲンボウ見守り隊

2007 年からの JR 二条駅舎のチョウゲンボウの繁殖に対して、地元の愛鳥家たちが集まって「見守り隊」を結成している。今までにも、チョウゲンボウの「巣立ち雛」が線路上や地上に不時着したところを素早く見つけ、悲劇が起こる前に救助し、近場のビルの上や街路樹に避難させ、無事巣立たせたことが何回もあったそうだ（このような処置が巣立ち雛の対応といえる）。

今回、この事件時に居合わせた見守り隊員が、駅員がとったこの処置を心配し、多くの見守り隊員に集合をかけた。駆けつけた隊員たちは、この雛の行く末を案じ協議した。その結果、「この処置では、孵化後間もない小さな雛が死亡するのは確実」との判断から、まずは目の前にいる雛の命を守ろうということになった。そして、「雛の命を守る役」に私が選ばれることになった。

○ チョウゲンボウの雛、保護依頼

そのとき私は、野鳥を求めて滋賀県朽木の山中をさまよっていた。ミソザザイのオス2羽の囀り合戦を観察し、キビタキ、オオルリ、キバシリそしてサンショウクイを観察しながら楽しい時間を過ごしていた。そのとき携帯電話が鳴った。朽木の山奥にまで電話が通じたのだ。チョウゲンボウの雛の保護依頼であった。そのチョウゲンボウの雛に対して、私も救護センターの指示のように「そこにそっと置いておけば」と返答したのだが、「巣立ち雛ではない、雛はまだ小さい、このままでは死ぬだろう。保護を頼めるのはあなたしかいない」といわれた。

私はフィールドの野鳥生態研究者（自称）なので、雛を受け入れ保護するとなると、2ヶ月間はフィールドに出られなくなる、ということが脳裏をよぎった。一方、チョウゲンボウは私の研究対象でもあり、以前から宇治の巨椋で生態観察をしている。だからチョウゲンボウの雛の保護はチョウゲンボウの生態を知ることには絶好の機会であった。そして私には、若いころからチョウゲンボウを一度飼育してみたいという強い願望があったのだ。電話での短い対応の中にいろいろな思いが交叉し返答に困っていたが、見守り隊員の熱意に押し切られ、結局、雛を受け入れることになった。私にとって、雛の保護は「うれし悲し」であったのです。

○ チョウゲンボウの雛、搬入・保護

朽木の山より帰宅すると、チョウゲンボウの雛は、すでに山西氏によって我が家に搬入されていた。雛は私に対して威嚇せず、私を見つめるそのつぶらな瞳は私に保護を願っているようにおもえた。

身体検査をすると、ひとつの外傷もなかった。20mの高所から肉の塊として落下したことを考えると、無傷であるということは奇跡としかおもえなかった。その後、打撲による影響、内臓損傷による状態の悪化が心配されたが、容態の変化に対応することにし、経過を見守ることにした。



5月30日 搬入直後のチョウゲンボウの雛

○ ゲンの野生復帰計画 GSP (Gen Survival Plans)

または SSP (Species Survival Plans)

- ・まず放鳥するための保護飼養とする
- ・彼に人格を与え、「ゲン」と名づけ、いつも呼び名で接すること。
- ・原則、檻飼いをせず室内で自由に行動させ、伸び伸びと育てる
- ・放鳥が前提であるので、絶対に翼や脚を傷めることがないように細心の注意を払う
- ・私の外出時のみ檻（檻といっても大きい）に入れ、不慮の事故が起こらないように怪我をしないように万全を期す
- ・夜の就寝場所は不慮の事故が起こらないようにクレート（小さな箱）内とする
- ・与える餌がなま物であるので感染症には十分注意する
- ・室内飼育が基本であるので日光不足での発育障害を起こさせてはいけない
- ・私以外の人間に慣れないようにする。なるべく私にも慣れないようにする
- ・発育途中であるので、餌を制限して私に慣れるようにとの鷹匠的な訓練をしない
- ・ゲンに、エンリッチメントを施し、生きる力、生きる喜びを発展させる
- ・保護にかかわった人たちに対して、ゲンの発育状況を報告する
- ・ゲンの兄弟の発育状況を参考にして、ゲンの育て方や放鳥時期を考える
- ・鷹匠の鷺鷹類の飼育方法や訓練技術も参考にする
- ・チョウゲンボウについてのあらゆる情報を受け入れ検討する
- ・ゲンを放鳥するしばらく前から、自然の餌（獲物）を与える。手から与えない
- ・私自身は、ゲンの親として、友人としての感情を抱かず、野鳥保護のスペシャリストであるとの自覚をつねに持ち、何事においても冷静な判断をすること。ただし、ゲンに対する愛情はつねに最高レベルを保たなければならない

見守り隊にお願いしたこと

- ・ゲンの保護受け入れ施設を検討してもらう
- ・ゲンの兄弟の発育状況・巣立ち情報をしらせてもらう
- ・ゲンの放鳥は見守り隊が行う
- ・ゲンの放鳥場所については現地調査をし、現地の人意見をも参考にする
(猛禽類の放鳥は、現地住民の理解と賛成が得られることが望ましい)
- ・梅雨が明けるまでは放鳥しないこと。また放鳥日、悪天候であれば延期する
- ・バッタ類が多数出現するまでは放鳥しない
- ・秋には、環境が良く、且つ餌の多い場所には多くの鷹類が渡ってくる。遅くともそれまでに放鳥する

○ゲンの保護記録

・5月30日 まず、雛の名前を「ゲン」とした。この名前は妻が考えたのだ。チウゲンボウのゲンと元気のゲンを掛けたとのこと。ゲンの状態が安定しているので餌を与えることにした。鶏の精肉を与えようと肉の小片をゲンの嘴のところまで差し出したところ、ゲンは少し抵抗した。そして嘴を開けなかった。そのため強制給餌することにした。少し時間をおいての2度目の給餌のときは自ら喜んで食べてくれた。ゲンが給餌に抵抗したのは初回だけであった。その後、嘔吐もなくゲンは元気であったため、その夜、私は何の不安もなく就寝できた。

・5月31日朝、ゲンは前日より元気になっていた。やはり昨日は元気がなかったようだ。身体検査のため、つかもうとすると足指(趾)で攻撃された。人間を外敵とみなし、防御的攻撃をしてきたのだ。それをなだめて手のひらに載せると落ち着いていた。両脚の動きはスムーズであり握力も十分である。翼の下垂なく、翼を広げても骨折は確認できなかった。ゲンは私の差し出す餌を機嫌よく食べてくれた(私がゲンをつかもうとする際の、ゲンの防御的攻撃は4日ほどでなくなった)。

ゲンに与える餌のことだが、血を含まない精肉は栄養学的には悪い食べ物となる。そのため翌日からは、とりあえず入手簡単な鶏肉類を選んだ。鶏肉は手羽先、骨付き肉、そして血の多い肝臓や心臓など。そして、その骨の骨髓を採取し、肉にまぶして与えた。また、発育中のゲンにはカルシウムが相当量必要なので、ビタミンD3入りカルシウム剤と鳥用のビタミンD3配合の総合ビタミン溶液を購入し投与することにした。鶏肉は腐敗が早いので、腸炎防止のため整腸剤として有孢子性乳酸菌を選び投与することにした。

当初、ゲンに近づくだけで、口臭・体臭を認めたが、数日後にはその臭いが感じられなくなった。このことは、不潔であり、ひどい臭いが発生していたであろうチウゲンボウの巣内の臭いが薄れていったものと考えられるが、整腸剤の効果もあったものと考えられた。



一夜明けた5月31日のゲン(左右)

・6月2日 私は、ゲンの兄弟のことが気になり、JR 二条駅舎の営巣場所を尋ねた。駅前広場からの観察であったため、ゲンの親兄弟の確認はできなかった。



6月1日



6月2日



6月3日



6月4日 雛は日に日に成長する

・6月6日 今度はJR 二条駅舎のプラットホームから営巣場所を見ることにした。メス親が巣の傍で外敵の襲撃に備えてあたりを監視していた。巣の入り口に、ゲンより発育日数が同等か少し多いかなとおもわれる雛一羽を確認した。その後、雄親も巣に飛来し、線路上のカラスを見つけ、追い払いに行くところがみられた。



6月6日 駅舎の屋根裏、カラスを警戒して巣の周辺を見張る雌親（左）と雛（右）



6月5日



6月6日 駅舎の雛より綿羽が多いかも



6月7日



6月8日 歩くことができているようだ

- ・6月8日 このころから歩くようになった。チョコチョコと駆け足もできる。
- ・6月9日 羽ばたくようになった。床から高さ30cmの止まり木に飛び乗ったり高さ90cmの台から床に飛び降りることができるようになった。



6月9日 飛び降りようとしている



6月10日

- ・6月12日 ハヤブサの縫いぐるみをみせ、その内蔵されたハヤブサの声を聞かせると、興奮したり、甘えたり、咬みついたりなどのさまざまな反応をした。

趾瘤症（バンブルフット）予防のために、止まり木には布がまかれている。



6月11日



6月12日 ハヤブサの縫いぐるみでゲンを刺激

・6月13日 ゲンは順調に発育している、当院での保護が長期になることを考えてマウス、ウズラ、雛ウズラ等の鷹飼育用の餌を注文することにした。このころから少しだけ飛ぶようになった。頭部にはまだ少し綿羽が残っている。この綿羽がなくなるころが巣立ちのときとおもわれる。

このころから昼間は動物飼育用の温室で自由にさせることにした。温室にはリス、インコ、爬虫類が同居しているが、この時点では、ゲンはリスやインコに無関心であった。しかし、しばらくして上手く飛べるようになったときにはゲンはリスをみてリス籠に飛びつくようになった。網の隙間に足指を入れるほどの激しさだった。



6月13日（左右写真） 餌をみせて飛ぶようにと促すと3mほど飛んだ ゲンの左はリス籠

・6月14日 JR二条駅舎のチョウゲンボウの雛（カラス襲撃の難を免れた3羽）の1羽が巣立ったという情報をもらった。ゲンもそろそろ巣立ちの頃とおもわれた。

・6月15日 室内を自ら飛んだ。直線距離で約10m。昨日からの羽ばたき練習は、今日は一段と激しさを増した、奇声を発して恐ろしい形相でしている。キキキキキッという激しく鋭い声は威嚇のときの声のようであり、とても興奮している。

頭の綿羽がほとんどなくなったことや、室内を頻繁に飛ぶので、今日がゲンの巣立ちの日とするのが妥当と考えられる。するとゲンは2番子と考えられた。



6月14日 力強い羽ばたき練習



6月15日 奇声を発して激しく

○ゲンの餌

・6月16日 注文のマウス等が届いたので早速与えることにした。いままでのゲンの餌は、ミルワームやロイヤルミルワームの幼虫と成虫、高栄養のドッグフード、骨付き鶏肉、手羽先鶏肉、鶏の肝臓や心臓であり、それぞれにカルシウム剤、ビタミン剤、乳酸菌製剤を必要量添加して与えていたが、今日からは自然食に近い、マウスとウズラ、雛ウズラを与えるようにした（*注 鶏肉はマレック病感染の、ハトはトリコモナス感染の危険性があると指摘されている）。

雛ウズラは、頭部と脚を切断し、羽が付いているので皮ごと剥ぎ取り、その体内に残っている卵黄嚢と腸管を取り除いたものを与えた。ピンクマウスは解凍してそのまま与えた。餌は冷凍処理されているが、適切な保存状態とは限らないので強力な腸内細菌ペディオコッカス菌を投与して細菌性腸炎に備えた。「餌は人間から貰うものでなく、自分で探すもの、取りに行くもの」と教えるために、私は餌を手から与えることはさけ、置いたものや遠くに投げたものを取りに行くように仕向けた。



6月16日 Sサイズの冷凍ピンクマウス



6月18日 雛ウズラの肉

- ・6月17日 3羽目も巣立つ。(2羽目の巣立ちは15日か16日か定かでない)
- ・6月18日 見守り隊の西村氏、山中氏、湯浅氏の3名、ゲンのお見舞いに来られた。そしてゲンの今後について相談した。
- ・6月20日 このころから、趾で何でもつかむし、嘴で引きちぎろうとする行動が頻繁となった。「握る力」と「引きちぎる力」を強めるためにしているのだろうとおもわれた。また、遊び心が芽生えてきて、生きていることがことのほか楽しいようだ。そして、どんどん本能が芽生えてきているな、とおもわれた。



6月27日



7月11日 ウズラ肉を縫いぐるみネズミにつけて



7月22日



7月24日 少し大きなマウスを食べる

○エンリッチメント

さらに知能の発達と行動力アップのため「エンリッチメント」を行った。狭い空間に閉じ込めて放置する、あるいは興味あることをさせなければ、生きる力や生きる喜びがなくなり行動力が衰退する。それは放鳥予定のゲンにとっては危険なことで、野生復帰が危ぶまれることになるからだ。

エンリッチメントとは、「飼育下の動物の精神的な健康をあの手この手で向上させる試み」のこと。動物系の縫いぐるみ、ヘビのようなボールペンとコードを駆使してゲンを発奮させ、また餌は狩りの練習になるような与え方をした。



・6月27日 阪上氏、須藤氏、ゲンのお見舞いに来られた。両氏は泉大津ハヤブササポート倶楽部に所属され、ハヤブサの保護・放鳥の経験者であり、保護施設についてもご存知である。ゲンは放鳥か保護か、保護施設等について相談をした。

・7月1日 中村氏は全国野鳥密猟対策連絡会に所属され、全国の保護施設についての情報を持っておられる。また、京都府の緑の指導員（鳥獣保護員）でもある。私は中村氏に会い野鳥保護施設、放鳥等の相談をした。

・7月19日 現時点ではゲンの受け入れ保護施設が見つかっていないことや、放鳥の時期が近づいてきたこともあるので、見守り隊8名の人たちとゲンの今後について相談した、贅沢なことに御所のアオバズク繁殖場所で巣立ち雛を観察しながら。

＊「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）」の存在

＊ゲンの元気さ ＊ゲンの独立心や本能の芽生え ＊野生の本能の力

＊チョウゲンボウの適応能力の高さ ＊野鳥保護施設 などを話し合った。

協議の結果、放鳥場所の環境確認とバッタ生息の有無を調査し、そしてもう一度ゲンの発育状態（仕上げ状態）をみて、放鳥か否かを決めてもらうことにした。

私は宇治の巨椋にバッタ調査をすることに、また、西村氏には、京大のバッタ研究者にバッタの発育状況を聞いてもらうことと、関西にある野鳥保護施設の状況については中村氏に今一度聞いてもらうことになった。

・7月20日 私は、セッカの調査を兼ねて、宇治の巨椋にバッタ生息調査した。トノサマバッタの少々の確認ぐらいで、イナゴはまだ確認できなかった。巨椋はカラスが多いことが心配材料であった。

・7月21日 見守り隊7名がゲンのお見舞いに来られた。現時点では、関西にはゲンの受け入れ施設がないということであった。皆がゲンの元気な状態をみて安心し喜んでくれた。そして私たちの手でゲンを放鳥することに決まった。

京大のバッタ研究者の話では、宇治の巨椋や左京区の岩倉のバッタ、イナゴはまだ早いということであった。次に滋賀県という案もあったが、亀岡が候補地にあった。すぐに亀岡の保津川河川敷と堤防周辺を調査することが決まった。そして、現地に詳しい江嶋氏（亀岡在住）に協力を求めることにした。そこでバッタが多数確認できれば放鳥場所は亀岡になる予定である。

・7月22日 木崎ご夫妻、小野氏と私の4名で亀岡のバッタ生息調査を行なった。バッタ類は多数捕獲できた。ゲンに餌として与えようとしたとき、バッタが逃げたが、ゲンはそのバッタに飛びつき見事に捕獲した、所謂「狩」をしたのだ。私は、「バッタが餌だよ」と教えていない、動くものに飛びつくという本能の行動だった。

・7月23日 亀岡の放鳥場所の選定のため、私は、木崎ご夫妻と江嶋氏と保津橋で合流した。そして、A,B,C,Dの4箇所ではバッタの生息状況、止まり場所、休憩所、

埤そして天敵カラスの生息数などを調査した。

A 地点 堤防上であり、トノサマバッタが比較的多くみられた。近くに家屋とフェンスや木立があるが、残念なことに餌探しの用の止まり場所がなかった。保津橋が近いので橋の所が休憩所や埤に使えないだろうか。

B 地点 堤防上で理想的な電柱と電線があった。餌を探すことにとても良いところであったが、残念なことにバッタが比較的少なかった。江嶋氏の説明では、最近土を入れての造成なので、まだバッタは少なく来年から増えるだろう、とのことであった。周辺には環境のよい草原があったのだが。

C 地点 江嶋氏の農地である。農地には作物が実っている。スズメが多数確認できたが、バッタやイナゴは確認できなかった。見張り処となる農作物の杭が多数あるが、そこでスズメを捕獲できるかどうか心配である。

D 地点 高すぎる電柱と電線がある。そこは見張り処となりにくいかも知れない。バッタは少し確認できたが、すぐ近くに民家が密集している。民家は心配の材料となる。人間に育てられた猛禽類は「食物の供給元」と思い込んで人間に近づくことがあるといわれている（ゲンハ、人間に依存しないように育ててあるが）。

この4地点において、カラスはほとんど確認しなかった。トビは少数確認した。



手前中央がA地点の堤防、ここでトノサマバッタを多数確認した。手前右は広大な河川敷。左は水田と小高い里山。奥にB,C地点を望む。保津橋から撮影

・7月24日 酷暑が続くなか、この日も木崎ご夫妻は引き続きバッタの調査と採集をされた。A地点でのバッタの生息数が2日前より増えたとのこと。ゲンは、木崎氏の差し入れバッタをよろこんですべて食べてくれた。

この3日間、私はゲンの訓練とおもい、バッタやトンボを生きている状態で室内に放ち、狩の練習をさせた。このことは「生きた動物を猛禽に与えることは、英国では1911年から1964年の間に制定された動物保護条例によって違法」となっていることを知りながらの行為でありました。切ないおもいで与えました。バッタさんには心からお許し願いたいとおもっています。



・7月25日 午前9時、私たちはA地点とD地点の中間に位置する保津橋のところに集合した。そこでA,B,C,Dの調査地点の状況を説明した。そして、A地点での放鳥が決まった。幸運なことに、A地点近くには京都府緑の指導員（大ヶ谷氏）がおられ、江嶋氏は今回のチョウゲンボウの放鳥のことを話され、理解と協力を得ていただいていた。

○ゲンの放鳥

・7月25日 いよいよ放鳥だ。多くの関係者が見守るなか、ゲンの入っているクレートの扉が開かれる。

扉を開くのは私だ。ここにきて私には急に親心が芽生えてきた。私は悲しくつらくなった。ゲンはうまく飛び出してくれるのであろうか、とても不安だ。祈っている。「ゲン 飛べ 大空へ」

ゲンはクレートから数歩出て、一度立ち止まり周囲を観察した。そして私の心配をよそにゲンは大空に向かって力強く飛び出した。半径50mにはあろうかとおもわれるほどの大きな円を描いて、私たちの周りを大きく旋回した。環境を確認する飛行とおもわれた。もうツバメがゲンを確認し数羽近寄ってきた。ゲンをチョウゲンボウと認めてくれたのであろう。ゲンはその後、私たちの元に戻ってくるのだろうかと思っていると、ゲンは3度旋回すると近くの藪の中に入って行った。小枝に止まっている。「どうしたのだ、これからどうするのだ」と、とても心配した。ゲンは興奮する心を静めていたのであろうか、ほどなくして、ゲンは遠くの山のほうに向かって飛び出した。高くたかく。「これはすごいぞ」と私は驚いた。本能の命ずるままに行動を起こしているのだろう。これは本物の飛翔ではないか。

いま、ゲンは山のかなた上空を舞っている

一人前にソアリング・グライディングをしているではないか

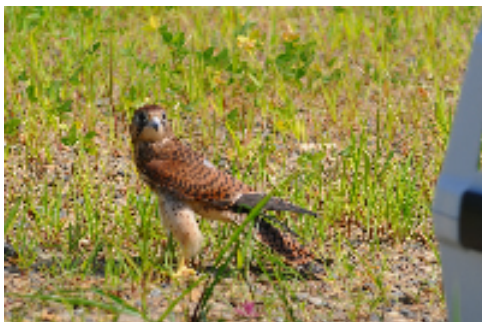
ゲンの生まれ持った能力は、かくもすばらしく、見事なのだ

ゲンはすごい、これからなんでもできる、狩だってできるさ

と、おもっているうちに、ゲンはとうとう空のかなたに点となり、その点は感激の内に消えていった。



ゲンの飛び出す瞬間を見守る関係者 ゲンは右にある小さなクレートに入っている



クレートから出て、あたりを見渡し、そして大空に飛び立った（左右：阪上氏撮影）



すぐにツバメが寄ってきた。鷹と認めてくれたのだ。私には祝福ととれた



はるか上空でソアリング、グライディングをして、そして、かなたへと消え去った

おわりに

今回、「JR 二条駅舎チョウゲンボウ見守り隊」は、落下雛の保護に際しての「不適切な対応」に対して悩みました。協議して「自分たちで保護する」を選択しました。そして町の愛鳥家、町の野生鳥獣保護関係者等の協力を得て、保護したチョウゲンボウの雛を放鳥するに至りました。元気に大空へ飛び出したゲンをみて、私たちは、放鳥は「成功」であったと感激し、選択した方法に対するその答は「正解」であった、と確信しています。

いま、ゲンはどうしているのだろうか、生存確認はできるだろうか。私は放鳥数日後2回放鳥場所のA地点を訪ねました。しかしゲンに会えませんでした。C地点でチョウゲンボウを見たとの情報がありました。放鳥2日後とのことです。見たという人は亀岡在住の野鳥観察の達人です。私たちはその鳥がゲンであってほしいと願うばかりです。

いつのときも保護鳥の放鳥は心配です。野生の鳥も自然の中で生き抜くことは厳しいものです。人間に育てられたゲンにとってはなおさら厳しいものです。保護にかかわった私たちも心配のあまり、その自然の摂理につぶされそうです。しかしその摂理を理解し、心配を乗り越えて行動を起こさなければなりません。十分に検討された生き残り計画（Survival Plans）を立ててです。

JR 二条駅舎において、チョウゲンボウの繁殖は今後も続くでしょう。いつか、また今回のような事件が起こるかもしれません。そして、全国の都市部での繁殖が増えているなか、どこでもこのような事件や類似の事が起こり、それに直面した人が保護の方法で悩む可能性があるとおもわれます。そのとき、この「**ゲン 飛べ大空へ**」が参考になり、多くの雛たちの命が救えたとしたら、これほどうれしいことはありません。



GSP (Gen Survival Plans) に関わられた人たち

JR 二条駅舎チョウゲンボウ見守り隊

井尻博三 1) 宇野千枝子 1) 小野育子 1) 木崎和子 2) 木崎嘉弘 2)
西村雄二 3)4)5) 山中久二子 1) 湯浅葉子 1) 吉岡京子 1) 薬応夏枝 1)

山西哲二 1)

チョウゲンボウの観察、保護

中村桂子 3) 6) 7) 8)

保護の相談

阪上幸男 2) 9)10) 須藤 薫 2) 9)10)

保護の相談、放鳥日参加

江嶋正生 11) 竹本正雄 11)

バッタ調査、放鳥日参加

大ヶ谷宗一 7)11)

放鳥の協力、放鳥日参加

三宅慶一 2) 12)

保護・養育

-
- 1) 町の野鳥観察家 2) 京都野鳥の会 3) (財) 日本野鳥の会
4) NPO 法人バードリサーチ 5) 京滋ホークリサーチ 6) 全国野鳥密猟対策連絡会
7) 京都府緑の指導員 8) 日本野鳥の会京都 9) 泉大津ハヤブササポート倶楽部
10) 日本野鳥の会大阪 11) 亀岡コウノトリの会 12) (社) 京都市獣医師会 野
生鳥獣救護指定獣医師

注) GSP について

SSP とは Species Survival Plans の略であり、日本語訳は「種の保存計画」となります。動物園では、絶滅危惧種に対して行われています。

京都府では、チョウゲンボウは準絶滅危惧種であります。GSP とは、私が SSP を真似たものです。種がチョウゲンボウであり、その名がゲンであるからです。

参考図書

日本鳥類目録 改訂第6版

ハチクイは、旦那が実家に入り浸り ニコラス・ウェイド 編

鳥類の研究（生態） 黒田長久 著

日本鳥類大図鑑 清棲幸保 著

鷲と鷹の生活誌 高野伸二 文 鷲と鷹 季刊アニマ 平凡社

大都会を生きる野鳥たち 川内 博 著

森の野鳥を楽しむ 101のヒント 日本林業技術協会 編

色と大きさで分かる 野鳥観察図鑑 杉坂 学 監修

知りたい鳥がすぐわかる！ 日本の野鳥図鑑 松田道生 監修

野外観察ハンドブック 校庭の野鳥 唐沢孝一 著

チョウゲンボウ 浦本昌紀・樋口広芳 文 動物の世界大百科 日本メール・オーダー社

世界猛禽カタログ バンク町田 著

動物園にできること 川端裕人 著

バード・クリニック・プラクティス B.H.コールズ 著

野生動物 ファーストエイド・ガイドブックⅡ 日本小動物獣医師会 編

野生動物救護ハンドブック 野生動物救護ハンドブック編集委員会 編

